

大学教育における学術的英語読解力 養成のための授業研究

——コロナ禍における授業方針の変更とその影響¹——

飯 田 毅

1 はじめに

文部科学省は「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）」の中で、日本の各大学が「学修者²本位の教育」を目指すべきであるとしている。これを授業レベルで言い換えれば、大学の授業において個々の学生の力を最大限に引き出す授業が求められている、ということである。しかし、「学修者本位の教育」が求められているので授業研究に取り組むと言うのは大学人として主体性に欠ける。本来なら各大学の教員一人ひとりが自主的かつ組織的に取り組むべきものである。筆者は、その経歴及び専門分野から大学生の能力を開発するための授業研究に取り組んできた。本研究の目的の一つは近年の文部科学省の大学教育政策を概観し、英語授業学との関係を明確にすることである。次に、その関係に基づき学術的英語読解力（英語読解力）養成のための授業研究に焦点を当てる。新型コロナウイルス感染症（コロナ）が蔓延する中でオンラインの授業は教師側の授業観にどのような変化をもたらしたのか、学生はその授業をどのように受け止めたのか、そして学生の英語読解力はどのように変化したのかを明らかにする。18歳人口が減りつづける中で、文部科学省による高等教育政策と大学英語授業学との関係を問い直し、コロナにより大学の教育がオンライン教育に舵を切らなければならなかった中で、改めて英語読解力の授業は学生の英語力及び学習観にどのような影響を与えたのかを探究することは英語教育及び大学教育改革の見地から

も意義がある。

2 高等教育の変化

文部科学省が進める近年の大学教育改革の特徴を以下5つの教育政策及び法律改正に見出すことができる。一つは、平成26年「大学のガバナンス改革の推進について」（中央教育審議会大学分科会）において大学のガバナンスの強化が進められた点である。特に、同年の「学校教育法及び国立大学法人法等の改正」によって学長の権限が強化された点が大い。また、平成30年「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）」（中央教育審議会）において学修者本位の教育が述べられた点は前述した通りである。令和2年には「教学マネジメント指針」（中央教育審議会大学分科会）が出され、大学教育の質的転換、目的達成のための管理運営が強調され、「教学マネジメント」という言葉がキーワードになっている。この言葉は日本の大学における教育改革（質的転換）の重要性を改めて示していると言える。そして、令和3年には「教育と研究を両輪とする高等教育の在り方について～教育研究機能の高度化を支える教職員と組織マネジメント」（中央教育審議会大学分科会）が打ち出され、大学教育の中で教職員が一体となって組織的に教育改革に取り組むことが強調されている。

このような改革の背景には、第一に世界的に展開されるグローバル化の進展とともに学生獲得競争及び高等教育の諸制度等の国際標準化がある。学生獲得競争とは先進国を中心として先進国以外からの学生を受け入れようとする競争のことである。その競争は、同時に各国における教育の質の保障の確保につながる。特に先進国の間では、諸制度等の国際標準化が求められている。さらに、米英、北東アジア、EU や ASEAN における高等教育の国際的通用性の向上が求められ（早田，2021）、それは同時に日本における国際競争力と大学の教育研究水準の質維持と向上につながる。

2018年11月に中央教育審議会は、2040年の展望と高等教育が目指すべき

姿として、「学修者本位の教育への転換」を掲げている。初等中等教育では、「学習者中心の教育」と言う言葉で既に実践されているが、大学教育においても学修者本位の教育を打ち出した点は評価できる。その提言の中で筆者が注目したいのは、以下の言葉である。「個々人の可能性を最大限に伸長する教育」「何を教えたかから、何を学び、身に付けることができたのか (p. 6)」「単に個々の教員が教えたい内容ではなく、学修者自らが学んで身に付けたことを社会に対し説明し納得が得られる体系的な内容となるよう構成することが必要となる (p. 6)」いずれも大学教育だけでなく教育の本来のあり方を述べている点で重要である。

一方、教学マネジメントについては学修者本位の教育を実現するための「大学がその教育目的を達成するために行う管理運営」としている。その管理運営によって、「入学者受け入れ方針」「卒業認定・学位授与の方針」及び「教育課程編成・実施の方針」に基づき、学修者本位の教育の実現を図るための教育改善に取り組み、社会に対する説明責任を果たしていく大学運営が必要とされている。

この学修者本位の教育と教学マネジメントを進める流れの背景には、少子化による大学経営の危機感と教職員への期待がある。大学進学率が50%を超えるユニバーサル段階においては、かつての少数エリートを対象とした学問の知識の伝授という教育方法では大学教育そして大学経営は成立しない。近年における学生の多様化は大学教育の多様化を促し、教師自身も柔軟に変化することが求められている。大学における教育と研究の活性化を促すためには、大学教員一人ひとりが生き生きと熱意を持って教育研究活動に打ち込めることが重要である。至極あたりまえなことである。心ある大学教員であれば、本来このようなことを言われる前に実践しているはずである。しかしながら、この提言の背景には、現状は決して提言通りになっていないという文部科学省の認識を示しているのではないだろうか。

3 高等教育と英語授業学

たとえ学長の権限が強化され、学修者本位の教育、教学マネジメントが出され、大学の管理運営・経営面が強化されても教職員全体として大学教育に真剣に取り組まなければ、本来の大学教育の目的は実現できない。その目的達成のためには、言うまでもなく、専任教員と非常勤教員との区別なく教員一人ひとりの授業への真剣な取り組みが大切であり、それを支える職員のサポートが重要である。また、社会の要請や文部科学省の方針を取り入れた「入学者受け入れ方針」「卒業認定・学位授与の方針」「教育課程編成・実施の方針」があっても、その方針が実際に学生の教育に活かすことができない、絵に描いた餅になってしまう。

大学の英語教育においても上記の3つの方針に従った授業展開が期待される。実際の授業では担当教師がその方針を学生の実情に合わせて具現化する必要がある。3つの方針は、通常個々の授業のシラバスに反映される。ただ考慮すべき点は、シラバスの方針が日々の英語の授業の中で、どのように活かされているのか、そして日々の授業実践を通して学生に何を与えることができるかである。英語授業学は大学、学部・学科経営・運営の役割の一部を担うと同時に、それぞれの3つの方針との関係を明確にした上で教師の授業実践を支える役割を持つ。つまり、大学の言語教育の基礎基盤を支えるものが英語授業学である（図1）。と同時に、英語授業学は単に上からの方針を

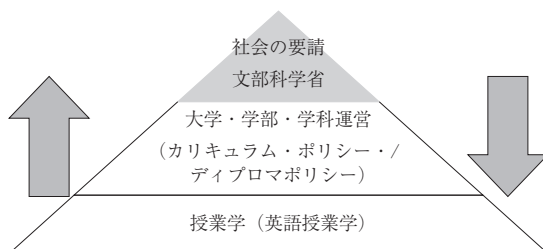


図1 大学教育政策と授業学の関係図

受けて対処するだけではいけない。その役割を認識した上で日々の実践をまとめ成果を発表することによって、大学、学部・学科の教育と運営に影響を与え、ひいては社会に貢献する重要な役割を担っている。換言すれば、教室での活動を基盤に置きながら社会の要請を実現するトップダウン的役割を担いつつ、日々の授業から社会に向けて発信するボトムアップ的役割を果たすことが大学教育における英語授業学の使命である。

4 授業研究

英語授業学の分野の一つとして、授業研究がある。日本には授業研究に関する伝統があり、主に高等教育より初等中等教育において広く実施され、Lesson study として海外でも広く知られている（例、橋本・坪田・池田，2003；Lewis, Perry, and Murata, 2006；小柳・紫田編2017；田中，2011；ウルフ・秋田，2008）。大学においても公開授業という名前で各学部・学科の代表者が授業を公開し、他の教員が参観するという Faculty Development (FD) が実施されてきた。日本の小中学校の指導法研修会では、研究授業によって各自の指導法の改善を目指す。研究授業では、それぞれの目標に沿った授業が学内及び学外の教員に公開され、その後授業者と参加者を中心に、授業の目的や指導方法について議論される。筆者自身この方法を用いて指導技術を磨いてきた。また、新井（2019）によれば、日本の小学校の班グループ活動がアクティブ・ラーニングの原型であり、逆輸入された、としている。このように日本の初等中等教育には独自文化として授業研究の歴史があり、教育改革を支えてきた。そのため、大学に FD が導入された初期の頃は、FD は教育方法改善に結びつきやすかった。上記の授業研究の問題の一つとして、公開される研究授業にだけ焦点が定まり、継続的な研究が進められていない点がある。

この問題を解決する方法として、アクション・リサーチの手法を用いた研究がある（例、飯田，1997；佐野，2001）。本研究はアクション・リサーチ

を用いて継続的に研究を進めてきた授業研究である。アクション・リサーチでは、授業実践者は単に自分の授業を分析し改善を図るのではなく、広くその分野の研究を参照しながら計画を立て、実践し、その結果を振り返り、学会や論文等で研究成果を発表し、その結果を基に再度計画を立て、継続的に取り組むという循環的な研究方法であり、その中で特に振り返り（reflection）が重要である。

本研究の対象は外国語としての英語リーディングの授業であり、今まで外国語としての英語リーディングに関する研究は盛んに行われてきた。またそのリーディング力の構成要素に関する研究も行われている（例、Kremmel, Brunfaut, Alderson, 2017）。しかしながら、その能力の習得過程をリーディングの授業研究を通して明らかにしたものは少ない。大学教育において学生の英語読解力は必要不可欠なものであり、その習得過程を明らかにすることは大学の基礎教育ばかりでなく英語読解力研究においても意義がある。

また、コロナ禍における大学全体の授業を調査したものに「コロナ禍後の大学教育」（2021, 金子）がある。金子は、コロナ禍の中で教師は個々の授業を教室での講義だけではなく、授業前、授業、授業後の一連のプロセスをからなる「構造化」された授業が可能かつ有効であることが経験された、としている。では実際にコロナ禍によってどのように大学の授業が変化したのであろうか。そこで、本研究は、コロナ禍において担当教師の英語読解力養成の授業方針の変化とそれが及ぼす学生の変容に焦点を当てる。授業担当者はアクション・リサーチの方法を用いて、前年度の反省を活かし、授業を見直し、新たな計画を立て、実践し、評価してきた。本研究の研究課題は以下3点である。

研究課題

- 1 英語読解力養成の授業の方針はコロナ禍を境にどのように変化したのか。

- 2 英語読解力養成の授業の変化によって、学生の英語読解力はどのように変化するのか。
- 3 英語読解力養成の授業の変化は学生の授業の受け止め方にどのような影響を与えるのか。

5 研究方法

5.1 参加者

この研究の参加者は、関西地区に位置する女子大学の学生であり、2学期間英語圏の大学に留学を義務付けている学科の学生である。したがって、一般の大学生よりも英語に対して高い興味・関心を抱き、総じて英語力が高い学生であると言える。参加者が受講するリーディングの授業は、1年次生を対象とした必修科目である。この科目は2007年度から始まり、2022年度である現在まで続いている。授業担当者は発足当時から変わらない。この間、留学に必要な英語力測定のための標準試験が変更になり、その設問に合わせるために指導内容項目の一部が変化した。が、基本的な授業目標や学習内容は変わらない。授業目標の一つは、留学に必要な英語読解力の育成にあり、また留学した大学の授業や帰国後の卒業研究等で英語の文献を読める力を養成することにある。

参加者は、新型コロナウイルス感染症発生以前の学生である2018年度に入学した1年次生（88名）とコロナ禍である2021年4月に入学した2021年度1年次生（81名）である。後者の場合は全員を対象とした分析と入学時英語4技能に関するプレースメントテストで全体的に高い得点を得た上位クラス（Aクラス41名）と下位クラス（Bクラス40名）に分けて分析を行なった。2021年度の春学期はほぼオンラインによって、秋学期は全て対面で実施された授業であった。2021年度入学生は、コロナ禍の影響により担当教師の指導方針が変化した時の学生である。

5.2 授業目標と到達目標

この授業は、大学入学後、留学時、卒業研究等に必要となる学術的英語読解に関する基礎的な力を養成することを目標とする。その目標達成のためには、学生の語彙、文法、構文に関する知識を増やし（下位処理能力）、それらの技能を深め、パラグラフに関する知識等を増やし思考を深める（上位処理能力）ことで学術的文章に慣れることが大切である。教材として使用してきたものは、TOEFL iBT や IELTS の英語標準試験用に開発されたリーディングの教材をはじめ、各種テスト、オンラインの教材、The Japan Times や The New York Times (International Version) 等の英字新聞記事である。この学科に入学するまでに参加者は、既に大学入試を意識した学習を通して英語の文章を読む練習をしてきている。しかしながら、英語圏の大学の留学に必要な読解力を身につけるためには、学術的な話題に対する知的好奇心、学術的な語彙力の増強、複雑な構文を読み取る力、学術的な論文の読み方の技能が必要となる。それらを学生は授業中に学び、思考を深め、授業外で個々の学習を通して身に付けていく。

シラバス上の到達目標は以下の4点である。

- (1) To get used to and have interest in academic reading.
- (2) To obtain and improve students' academic reading skills so that they can read academic texts quickly, accurately, analytically, and critically.
- (3) To increase the amount of academic English vocabulary and have sufficient grammatical knowledge, structures of sentences, and connections between sentences, and the structure of a paragraph so that they become a good academic reader.
- (4) To obtain a high score in the reading portion of standardized tests, in particular TOEFL iBT and IELTS.

学生によっては留学するための条件である TOEFL iBT や IELTS の得点を伸ばすことに最も関心があるかもしれない。しかし、単に標準テストの点数を上げるための授業は大学の授業としては不適切である。さまざまなテキストを英語で読むことで、学生は学術的な英語の文章に慣れ、学術的な内容に興味を持つことが大切である。また、単に読んで理解するだけでなく、素早く、正確に、分析的に、そして書かれた内容を読み取りながら真実は何かと自ら問う読み方を身につけることも大切である。ここで言う批判的 (critical) という言葉は、真実を追求するための一つの方法であり、読んだ内容についてそれが本当に正しいかどうかを自分自身で問い、熟考することである。即ち、リベラル・アーツ教育の根幹を成すものである (デズウィツ, 2016)。以下はシラバスに示された授業方法である。

Students can improve basic reading skills by reading materials in Super English, newspapers, and IELTS reading sections collaboratively, actively, and enthusiastically. They also can develop English grammar and vocabulary skills by practicing with Super English and reading newspapers. Before class, students are required to read and answer questions to passages in these reading materials given as homework. In particular, students read TOEFL iBT/IELTS reading tests. They then read the same passages on the computer screen and answer questions in the classroom. New questions are also given in the classroom. After reading with time pressure, they need not only give correct answers but also explain why the answers are correct. Articles in the newspapers are also used in class. Students do not have to read them before class. Reading strategies to improve reading skills are provided by the instructor. Also, vocabulary strategies, i.e., how to increase the number of vocabulary, are also

given. To talk about these with classmates and write about what they have read is very important to improve reading skills and to deepen the ability to think. It is important to cooperate fully with partners during class. All reading materials in Super English and words and phrases in IELTS and TOEFL reading materials will be used in the Mid-term and Final Exams.

基本的に学生は授業開始前に授業当日に読む箇所の語彙、表現、構文等を予習して授業に臨み、授業中は語彙テストや教師の質問に答え、新たな説明や内容の解説を通して理解し、読解力を身につけていく。春・秋両学期に中間試験と期末試験がある。授業で扱う以外の課題もあり、成績にも反映される。

評価方法は、到達目標に関連づけながら実施し、特にコロナ禍以前は年度ごとに多少の変化はあったが、概ね中間試験・期末試験を6割～7程度、宿題を1割程度、オンラインの教材の課題を2割～3割程度としていたが、2021年秋学期には変更することにした。詳しくは、6.1の新対面授業方針No. 3で述べる。この授業は90分の授業前半45分をリスニングの授業、後半45分をリーディングの授業に分けられているため、学生はそれぞれの科目を週2回受講することになる。

5.3 データ収集方法と分析方法

研究課題1については、コロナ禍の中、春学期がほぼオンラインの授業であったため、オンラインでの実践を含め今までの授業方針を見直し、秋学期の対面授業の基本方針（新対面授業方針）として4点にまとめ、それに基づき授業を行なった。

研究課題2は、上記の授業方針が学生の英語読解力にどのような変化をもたらしたかについて2種類のテストを使って分析した。最初に春学期及び秋

学期の最後に学生がそれぞれテストセンターで受験する IELTS リーディングの平均値と標準偏差を算出し、対応のある t 検定を用いて比較した。最初に全員を対象に比較し、次に4月に実施されたプレースメントテストの結果によって上位クラスであるAクラスと下位クラスであるBクラスに分け、それぞれがどのように変化したかを比較した。もう一つのテストは、English Language Proficiency Assessment (ELPA) を用いて、コロナ禍前とコロナ禍中の受容的英語力を比較した。ELPA は英語リスニング、文法、語彙、リーディング問題で構成されている。2018年度生と2021年度生の ELPA の得点を、それぞれの技能ごとに平均値を独立した t 検定を使って比較した。統計分析には IBM SPSS Statistics 28 を使った。例年年度当初実施される英語クラス分けテストの結果がほぼ同じ平均値であることから年度による学生の英語力の差はないと考えられる。

研究課題3は、新対面授業方針に対する学生の反応を調査するために、担当者の所属する大学で使用されている授業アンケートを使った。授業アンケートを利用する理由は、本授業科目は大学全体の一科目として位置づけられるからである。授業方針の変化そのものを学生に尋ねるのではなく、学生の受ける印象の変化を大学全体の尺度を用いて捉える。この方法は、指導方針の直接的な評価ではなく、間接的な評価である。また、大学全体や学科のデータを得ることができないため、厳密な統計的処理は行わない。しかし、この評価方法の長所は、本授業を学科及び大学全体と比較して捉えられる点である。本研究では、学生の評価を2つの同じ科目間（Aクラス、Bクラス）の平均、学科内の同類科目、この場合は英語スキル科目の平均（区分平均）、大学全体の科目の平均（全体平均）と比べることにした。

授業アンケートは、春・秋学期最後の授業で実施したものである。春学期は主にオンライン授業であり、秋学期は新対面授業方針の下で実施した授業である。春学期と秋学期のリーディングの授業に関する質問項目の平均値に変化があるのか、また、本授業は学科科目及び全体の科目の平均値との間に

表1 参加者数、使用した標準試験と授業アンケート

	コロナ禍以前	コロナ禍中
	2018年度生	2021年度生
人 数	88人	82人
使用した英語標準試験	ELPA	IELTS (春・秋両学期) ELPA
使用した授業アンケート		授業アンケート (A・Bクラス春秋両学期)

変化があるのかを比較する。前述したように、本比較は統計的手法を使った厳密な意味での比較ではない。しかし、この方法によって学修者の授業の受け止め方を大学全体及び学科内の科目という視点から読み取ることができる。表1は参加者、使用した標準試験と授業アンケートをまとめたものである。

6 結 果

6.1 新対面授業方針

コロナ禍以前のシラバスとコロナ禍中のシラバスの内容は基本的には変更はない。ただし2021年度秋学期の授業は春学期のオンラインの授業での経験や手法を活かすことにした。同時に改めて対面授業の良さを最大限に活用するために、かつ以前から実践していた方法を新たな方針としてまとめ、実施することにした。2021年度秋学期の新対面授業方針は以下の4点である。

- No. 1 英語読解力向上の学習方法の明確化
- No. 2 リーディングや英語力に関する研究成果及び Data の活用
- No. 3 学生の Motivation を引き出す。
- No. 4 対面授業の特徴を最大限に活かす。

No. 1 (Appendix 1 参照) は、英語読解力向上のためのポイントを明確にし、読解力向上に必要な不可欠な学習方法を抽象的なものから具体的なものま

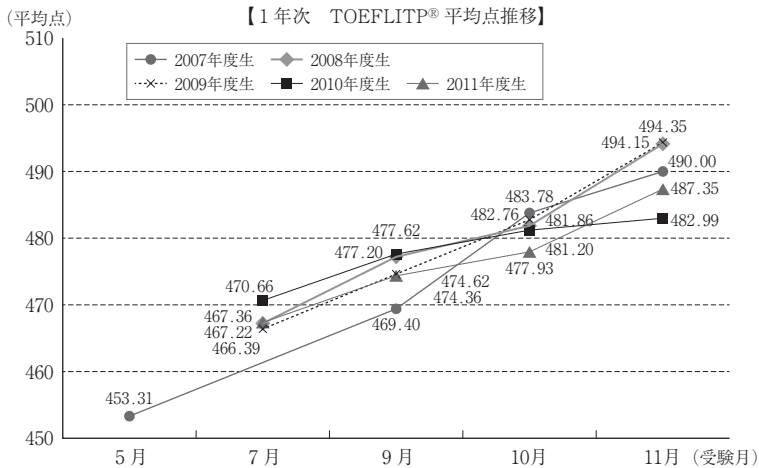


図2 研究成果の活用例

でを順に Axioms, Principles, Strategies (APS) の3つに分けたものである。APS は単に英語標準試験のテスト対策としたものではなく、大学及び卒業後も意識した英語読解の方法を明示した。学生の授業に臨む基本姿勢を含み、読解の学習内容と方法を具体的に提示している。毎回の授業は、APS 授業の目標として最初に提示し、目標実現に向けてその目標に合わせた授業を行なった。

No. 2 の 研究成果・Data の活用とは、2007年度から担当者が研究してきた成果や過去の学生の英語力変化を授業中に利用することである。例えば、図2は TOEFL ITP の総合得点の平均値の変化を示したスライドである。日々努力することで、学生の英語力が確実に伸びることを示すために利用したものである。担当教師が単に自主的に学習すれば英語力は向上する、とだけ述べるのではなく、明確な数字や根拠を提示することで説得力が増すのではないだろうか。

No. 3 は 学生の Motivation を引き出す工夫である。図3は授業中に使用したスライドである。Motivation 研究成果の活用するために、Self-confi-

Two concepts regarding “I can do it.”

- 「自身」(Self-confidence: general)
 - I can use English
- 「自己効力感」(Self-Efficence: specific)
 - I can answer this reading question correctly.
 - I can get 60 points of iBT scores.

図3 Motivation の研究成果の活用

dence（自信）には2つの種類があることを述べている。また、授業は、個人の学習ばかりでなく学生同士の共同学習が重要であることを強調することで学生を教室内での活発な活動へと導く。同時に共に学ぶことで学習意欲を高めることができる。共同学習では、事前に宿題として出したワークシートの質問の他に教室での教師側が用意した New questions に対して、ペアまたはグループで話し合う時間（20秒、30秒、60秒）を取ったり、著者の主張に対して、学生同士の意見を述べ合う時間を取るように配慮した。最後に、評価項目を見直し、学生が自主的に英語を読む活動に取り組むことを評価する項目を1割から2割に引き上げ、中間・期末テストの割合を少なくした。つまり、積極的に自主学習に取り組んだ学生を評価するようにした。

No. 4 は対面授業の特徴を最大限に活かすことである。授業担当者が実感した対面授業の最大の特徴とは、笑いと緊張感がある教室である。これこそは、オンライン授業が終了して授業担当者が対面授業の特徴として痛切に感じた点である。もちろん、オンラインでも実行可能かもしれない。しかし、同じ教室で共に過ごす中での緊張感と笑いは一体感を醸し出す。その一体感は、授業をより活動的に、より魅力的に、そして何より楽しさを醸成する。具体的には、以下7点を重視する。

- (1) 題材の内容を深める。一例として、題材に関係する教師の話を活かす

(時には題材のトピックに関する情報を補足することで笑いを引き出す)。

- (2) 教室での学生の間違いを誉める（正解ばかりでは授業は面白くない、間違いの中に教師の役割があり、教師と学生の学びがある）。
- (3) 学生の発言に対して、暖かく受け止め時にはユーモアを交えて応答する（学生の授業中の発言を大切にする）。
- (4) 学生の課題には必ずフィードバックする（学生の提出物には最低でも必ず一言コメントする）。
- (5) 良い回答は積極的に授業中に取り上げる（例：宿題の模範的解答）。
- (6) 励ましと厳しさの重要性（例：テストの結果について悪かった場合には励まし、提出物や宿題の期限を厳守させる）。
- (7) 全ての受講学生に対して授業3回に1回ぐらいは必ず指名し、何らかの反応を引き出す。

以上 No. 1 から No. 4 までは新対面授業方針として定め、2021年度秋学期に実践を試みた。

6.2 リーディング力の変化

新対面授業方針はどのような結果を招いたのであろうか。以下順に検討してみよう。

表2から春学期最後に各自が受験した IELTS リーディングの平均値と秋学期最後の平均値が統計的に有意に向上している ($t(80) = -4.37$, $p < .001$, $d = .5$) ことが読み取れる。表3と表4からAクラスとBクラスとも春学期と秋学期の結果が統計的に有意に変化している (Aクラス: $t(40) = -2.05$, $p = .047$, $d = .59$; Bクラス: $t(41) = -4.25$, $p < .001$, $d = .77$) ことも分かる。つまり、新対面授業方針が学生のリーディング力向上に何らかの影響を与えたことが示唆される。

表5は、2018年度生と2021年度生の ELPA を用いた受容的英語力の結果

表2 IELTS リーディング記述統計 (2021年度生全体)

	春学期終了時	秋学期終了時
M	5.0	5.5
SD	.68	.82
MAX	6.5	8.0
MIN	3.5	4.0

N = 81

表3 IELTS リーディング記述統計 (2021年度生Aクラス)

	春学期終了時	秋学期終了時
M	5.4	5.7
SD	.65	.95
MAX	6.5	8.0
MIN	3.5	4.0

N = 41

表4 IELTS リーディング記述統計 (2021年度生Bクラス)

	春学期終了時	秋学期終了時
M	4.9	5.5
SD	.61	.66
MAX	6.0	6.5
MIN	3.5	4.5

N = 40

表5 2018年度生と2021年度生の英語力比較

	2018年度				2021年度			
	M	SD	MAX	MIN	M	SD	MAX	MIN
語彙	116.0	13.1	150	88	113.5	17.2	150	64
文法	108.9	13.8	150	82	105.0	17.8	150	62
リーディング	233.1	38.0	300	130	220.5	46.2	300	75
リスニング	215.9	31.8	300	145	211.4	28.9	274	140

である。コロナ禍前とコロナ禍中の学生の語彙力、文法力、リーディング力、リスニング力を比較した結果を示している。表から平均値を比べると2021年度生の方が2018年度に比べて全体的に低いように見えるが、統計的には有意な差はなかった（語彙： $t(166)=1.085$, $p=.279$, n.s.; 文法： $t(166)=1.595$, $p=.113$, n.s.; リーディング： $t(166)=1.947$, $p=.053$, n.s.; リスニング： $t(166)=1.002$, $p=.320$, n.s.）。つまり、コロナ禍により、2021年度春学期はほぼオンラインの授業であったが、秋学期最後には2018年度と同じ受容的英語力を示している。言い換えれば、コロナ禍によりオンラインの授業によるリーディング力低下の影響はなかったことを示していることが読み取れる。ただし、それが秋学期の新対面授業方針が影響したかどうかはこの段階では言えない。

6.3 授業アンケートの変化

表6は、2021年度授業アンケートの結果を示している。表6からAクラスとBクラスの間には項目によっては差があるが、全体平均や区分平均より本研究対象の英語リーディングの授業は学生の受け止め方が良いことがわかる。また、AクラスとBクラスの平均値を比較するとAクラスの方が全体的に高いことが読み取れる。最後に、春学期と秋学期の結果を比較すると、Aクラスは、秋学期に平均値が下がった質問項目（Q1, Q10, Q12）と秋学期の方が春学期より上がった質問項目（Q4, Q7, Q15）が同数であることが読み取れる。一方Bクラスは、秋学期の方が春学期より上がった質問項目が多く（Q3, Q4, Q7, Q9, Q10, Q11, Q14, Q15）、下がった質問項目はない。上記の結果から、新たな方針で臨んだ秋学期の授業評価は、全クラス及び学科の英語スキル科目の評価よりも一般的に高く、英語力が高いクラスの方が低いクラスよりも総じて高い評価をし、低いクラスの方で秋学期の評価が向上している、とまとめられる。

表6 2021年度授業秋学期授業アンケート結果

Q	設 問	A 平均	B 平均	区分 平均	全体 平均
Q 1	授業内容はシラバスに合っていましたか	春5.0 秋4.9	春4.7 秋4.7	春4.8 秋4.8	春4.7 秋4.7
Q 2	受講生の理解度を確かめながら授業を進められていましたか	春4.8 秋4.8	春4.5 秋4.5	春4.6 秋4.7	春4.4 秋4.4
Q 3	授業レベルは自分に合っていましたか。	春4.6 秋4.6	春4.2 秋4.5	春4.4 秋4.6	春4.3 秋4.4
Q 4	教員からの一方的な授業でなく、教員と受講生または受講生同士の双方向性に工夫がされていましたか。	春4.7 秋4.8	春4.4 秋4.6	春4.5 秋4.6	春4.3 秋4.4
Q 5	提出物に対するフィードバック（採点、添削、マネージャーでのコメント、チェック後の返却など）は効果的に行われましたか。	春4.7 秋4.7	春4.5 秋4.5	春4.5 秋4.7	春4.3 秋4.3
Q 6	言葉による説明だけではなく、受講生の理解を促進する工夫がなされていましたか。	春4.7 秋4.7	春4.5 秋4.5	春4.6 秋4.7	春4.4 秋4.3
Q 7	自主学習を促す工夫がなされていましたか	春4.8 秋4.9	春4.7 秋4.9	春4.6 秋4.7	春4.3 秋4.3
Q 9	この授業は全体として満足できる内容でしたか。	春4.7 秋4.7	春4.5 秋4.6	春4.5 秋4.7	春4.5 秋4.3
Q10	この授業の予習、復習、自主学習（授業時間90分を除く）に1週当たり平均どれくらい時間をかけましたか。	春3.1 秋3.0	春2.8 秋3.1	春2.6 秋2.6	春2.3 秋2.2
Q11	あなたはこの授業に関して積極的に意見を述べたり質問をしたりしましたか。	春4.2 秋4.2	春3.7 秋4.0	春3.9 秋4.0	春3.7 秋3.7
Q12	あなたはこの授業の分野または関連分野の学習をさらに進めたいですか。	春4.9 秋4.5	春4.5 秋4.5	春4.5 秋4.6	春4.2 秋4.2
Q14	到達目標を達成しやすいように指導がなされていましたか。	春4.8 秋4.8	春4.5 秋4.6	春4.6 秋4.7	春4.4 秋4.5
Q15	あなたは到達目標を達成できたと思いますか。	春4.4 秋4.6	春4.1 秋4.4	春4.3 秋4.4	春4.1 秋4.3
Q18	遠隔での授業は滞りなく行われましたか。	春4.7 秋4.7	春4.7 秋4.7	春4.7 秋4.7	春4.6 秋4.5

A：Aクラス（N=40），B：Bクラス（N=42） Q10：5：3時間以上、4：2時間以上3時間未満、3：1時間以上2時間未満、2：30分以上1時間未満、1：30分未満

7 考 察

本節では2021年度秋学期に立ち上げた No. 1 から No. 4 までの新対面授業

方針がもたらした以下3点の結果を中心に議論する。(1)英語読解力向上に何らかの影響を与えた、(2)コロナ禍以前の英語力とコロナ禍中の英語読解力を含む受容的英語力には変化がなかった、(3)授業評価から、本研究対象の授業は全学の授業科目や学科の英語スキル科目より全体的に高い評価を受けており、上位クラスと下位クラスでは、上位クラスの評価が総じて高く、新対面授業方針により下位クラスの評価が向上している。

(1)と(2)の結果から新たに立ち上げた対面授業方針は2021年度の学生の英語読解力向上に導いたが、2018年度、つまり以前の授業方針を越えるほどではなかったと解釈できる。このことについて以下考察を深めてみよう。

(1)の学生の英語読解力向上に直接導いたのは新たな授業方針の中で No. 1 である APS で考えられる。その理由は、APS は英語読解力向上のための方法を総合的にまとめたものであり、外部の標準試験にも対応できているからである。APS の特徴は、Axioms, Principles, Strategies と3つに分かれている点であり、順に具体的な項目内容になっており、単にテスト対策ではなく、学術的な文献を読むための目標になっている点にある。Axioms の最後に「本来の Academic Reading は、それに加えて、著者のメッセージに対して自分自身の意見を持つことが大切。その情報と自分の意見を自分の研究に活用する」と書かれている点に注目したい。この文は、学生の大学での学びばかりでなく、卒業後学術的文章に親しむために重要な点でもある。大学における初年次教育として、卒業までの学科の教育目標実現のため基礎科目であるばかりでなく、卒業後のキャリア育成を目指して行くための基礎的な能力になるからである。実際、この学科のカリキュラムにおいて学術的な英語読解力が2年次から要求されることを考慮すると、学術論文を読む際に必要な技能を1年次に習得しておくことが求められる。

本研究対象の授業の中で APS の指導項目として英語読解力育成に直接的に影響を与えたと考えられるのは、Ⅲの Thirteen Strategies for Academic Reading である。毎回の課題の中で、あるいは授業中においてそれぞれの項

目に関わる学習を通して(1)の結果に結びついたと考えられる。その理由は、英語読解力を構成する理論はさまざまあり、研究者によって構成要素の定義が異なるが、読解力の向上には概ね語彙力、文法力、文構造把握する力が最も重要である（例、Grabe, 1991, 2009；Kremmel, Brunfaut, Alderson, 2017）、と言う点で一致しているからである。また、実際に日本人大学生を対象とした調査でも良い読み手は、苦手な読み手に比べて語彙力、文法的知識、構文力を使って効果的に下位処理を行なっている（Ono, Midorikawa, Robson, 2001）、と報告されている。留学を目指した学生が直面する課題は、IELTS等の試験で出題される学術的語彙力と複雑な文構造を使って書かれた文章を理解する力である。この文章を理解するためには、下位処理として分類される語彙力と文法力が必要とされる。もちろん実際はそれだけでなく、パラグラフや文章全体を把握する上位処理の力も必要であることは言うまでもない。しかし、下位処理が容易にできる場合には上位処理も容易に取り組める余裕があるが（Iida, 2010）、下位処理ができない場合にはそれに集中するために正確な上位処理までできる余裕がない。語彙力や文構造把握の処理を容易に行えることが重要である。この語彙、文法、文構造について関して触れているのが APS のⅢである。学生の日々の積み重ねが(1)の結果に繋がったと解釈できる。

しかし、結果(2)が示すように APS を使った指導は2018年度の結果とほぼ同じであった。もし APS が本当に読解力向上に貢献したならば、2018年度の結果を有意に上回ったはずである。一方で、この結果が春学期のオンライン授業のため学生の英語読解力が下がり、秋学期になって APS によって向上して2018年度と同じになったとも考えられる。このようなことから APS の効果については今後の継続研究が必要である。

結果の(3)から新たな授業方針の No. 2 から No. 4 は学生のこの授業全体の受け止め方に何らかの形で寄与したと考えられる。特に、Bクラスの学生の伸びがAクラスの学生よりも高く、授業評価もBクラスの学生の方が高い伸

びを示している。しかし、No. 2 から No. 4 は読解力そのものより、授業評価全体に影響を及ぼしたものであると考えられる。教師側が意図した方針全てが必ずしも学生の受け止め方に直接的に反映されるものではないが、日々の授業における新対面授業方針の積み重ねが学生の授業の受け止め方に影響を及ぼすことは経験的に言える。No. 2 で過去のデータを見て、自分の英語力も最終的には伸びると信じて学習に励む学生もいるだろう。また、授業中の共同学習の影響により、学生同士のやり取りによって何か新しい読み方のヒントをもらったり、他の学生から語彙の新たな意味や難しい構文の意味を学ぶ学生もいると予想される（授業評価項目 Q 4, Q11）。

特に、入学時のクラス分けテストで低いグループの学生の方が秋学期に授業評価が上がったのは、春学期がオンラインで秋学期に対面になって、新たな授業方針がより明確に受け止められたためではないだろうか。一方、高いグループの学生はオンラインでもある程度自分でできたので、評価項目が下がった（Q 1, Q10, Q12）のではないだろうか。しかし、全体としては上位クラスの評価が下位クラスの評価よりも高かったのは、本授業の狙いや活動の意味をより正確に捉えていると考えられる。

8 結 論

本研究は、近年の文部科学省の大学教育政策を概観し、大学における英語授業学との関係を明確にした上で、英語授業学からの大学改革、社会に提案していくことの重要性を強調した。その改革の任務を英語授業学が担っている。本研究は、その改革の一例としてコロナ禍における大学1年次生を対象とした英語読解力向上のための授業研究である。コロナ禍の影響を受けた授業を活かし、かつ対面授業の良さを活かした新対面授業方針を2021年度秋学期に実施した。その結果、学生の英語読解力は向上したが、2018年度の結果とほぼ同じであった。英語読解力養成に直接関わる APS の効果については今後の継続研究が必要である。また、授業評価全体に関してクラスの差はあ

るが、全体的には良い影響をもたらした。このようなことから新対面授業方針は全体的に良い効果をもたらしたと言える。

コロナ禍の学修者がより好意的に授業を評価している理由は何であろうか。一つには学修者はオンラインの授業を経験したことから対面授業そのものが学修者に対してよりアピール力のある授業となっていたからではないだろうか。このことは、学修者本位の授業に近づいているとも考えられる。しかし、学生が *critically* に読んでいるかについてはこの調査で明らかにすることはできなかった。その意味で、学修者本位の授業の改善が実現できたかについては今後の課題である。果たしてそのような取り組みが本当に可能であろうか。大切なことは、それぞれの学問分野において研究の知見を活かした授業実践を研究することであり、授業実践の研究を基にした組織的な取り組みに活かすことである。しかし、組織的な取り組みに持っていく前に、本当に学生が能力を発揮できる授業であるかどうか、学生の評価に値する授業であるかを再度厳しく問う必要がある。その厳しく問う姿勢が本来の授業学の姿であり、かつ本来の大学教育改革、学修者本位の授業のあり方である。

引用文献

- 秋田喜代美, キャサリン・ルイス編著 (2008). 「授業の研究教師の学習レッスンスタディへのいざない」 東京: 明石書店
- 新井紀子 (2019). 「AI に負けない子どもを育てる」 東京: 東洋経済新報社
- デレズウィッツ, W. (2016). 「優秀な羊たち」 東京: 三省堂
- Grabe, W. (1991). 'Current developments in second-language reading research,' *TESOL Quarterly* 25/3: 375-406.
- Grabe, W. (2009). *Reading in a Second Language: Moving from Theory to Practice*. Cambridge University Press.
- 橋本吉彦, 坪田耕三, 池田敏和 (2003). 「Lesson Study/今、なぜ授業研究か—算数教育の再構築—」 東京: 東洋館出版社
- 飯田毅 (1997). 21世紀の英語教育. *ELEC Bulletin*, 104, 54-61.
- Iida, T. (2010). Instructed and Naturalistic L2 learners' metalinguistic knowledge: Does metalinguistic knowledge contribute to L2 proficiency? Unpublished

- doctoral dissertation, University of Reading, the United Kingdom.
- 東京大学大学院教育学研究科 大学経営・政策研究センター (CRUMP) (2021).
「コロナ禍後の大学教育:大学教員の経験と意見」研究代表者金子元久 (筑波大学)
- 文部科学省中央教育審議会大学分科会 (2013). 「大学のガバナンス改革の推進について」(審議まとめ) https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/1343468.htm
- 文部科学省中央教育審議会 (2018). 「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン (答申)」 https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1411360.htm 大学のガバナンスの強化
- 文部科学省中央教育審議会大学分科会 (2020). 「教学マネジメント指針」 https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1411360_00001.html
- 文部科学省中央教育審議会大学分科会 (2021). 「教育と研究を両輪とする高等教育の在り方について～教育研究機能の高度化を支える教職員と組織マネジメント」(審議まとめ) https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1411360_00002.html
- Kremmel, B., Brunfaut, T., Alderson, C. (2017). Exploring the Role of Phraseological Knowledge in Foreign Language Reading. *Applied Linguistics*, 38/6, 848–870.
- Lewis, C., Perry, R., Murata, A. (2006). *Educational Researcher*, April 2006; 35, 3; *ProQuest Education Journals*, 3
- Ono, N, Midorikawa, H., Robson, G. (2001). Exploring the Nature of Good and Poor L2 Reading Behavior. *JACET Bulletin*, 33, 73–88.
- 小柳和喜雄, 柴田好章編著 (2017). *Lesson Study (レッスンスタディ)* 京都: ミネルヴァ書房
- 佐野正之 (2001). 「アクションリサーチのすすめ」 東京: 大修館書店
- 早田幸政 (2021). 『内部質保証の背景とその意義』 永田恭介・山崎光悦編「教学マネジメントと内部質保証の実質化」 東京: 東信堂
- 田中義隆 (2011). 「インドネシアの教育—レッスン・スタディは授業の質的向上を可能にしたのか」 東京: 明石書店

Appendix 1

2021 IELTS, TOEFL iBT reading 力向上のヒント

I Eight Axioms of Academic Reading

- 1 達成可能な目標を立てる。(例 現在 Reading section, Band 4 or 4.5→12月 Band 5 or 5.5)
- 2 読んでいる中で、分らない状態に耐え、最後まで読もうとする意欲が大切。
- 3 Passages の内容を全て理解する必要はない。慌てず、落ち着いて読む。
- 4 書いてある内容に興味を持つ。意義を見いだす。
- 5 一見難しい内容を理解しようと努める。理系の内容でも関心を持つ。
- 6 日頃から、新聞や本等の活字に親しむ。抽象的な内容をできるだけ読む。
- 7 Reading は訳すことではない、passage から意味を引き出すこと。
- 8 Phrase や clause で意味を取る。

以上が iBT や IELTS の reading section で理解することである。本来の Academic Reading は、それに加えて、著者のメッセージに対して自分自身の意見を持つことが大切。その情報と自分の意見を自分の研究に活用する。

II Six Skills for Academic Reading

- (1) 60分の問題で、Passage は3つ。Passage の内容は英語圏の大学で使用される学問領域や話題に関する入門書のレベル。20分。
- (2) まず Heading (Title) を読み、内容を想像する。背景知識を活性化させる。
- (3) One passage は800-1000 words、ざっと超速読し (Topic sentence だけ読み)、全体の内容を掴む。
- (4) 質問は、原則として各 Paragraph ごとに順に出題される。質問の内容を理解する。
- (5) 質問は、ほぼ同じ形式の質問。質問の形式に慣れる。
- (6) 質問を読み、答を自分で考える、または、Paragraph から探す。次に、選択肢を選ぶ。選択肢には明らかな誤りの選択肢が入っている。

III Thirteen Strategies for Academic Reading

1. Heading から Passage 全体の内容を予測する。
2. 図、写真、表があれば、Passage の内容と関連付けながら理解する。
3. Heading や keywords を読んで、自分が持っている背景知識 (Background Knowledge) を活性化させ、内容理解に利用する。
4. Academic vocabulary を理解する。日常で使う語彙と区別できるようにする。
 - 4.1 Passage 全体の keywords に注目し、Passage 全体の意味を掴む。
 - 4.2 意味がわからない単語の意味を前後関係から推測する。
 - 4.3 単語の意味を形 (接頭語、接尾語) から推測する。
 - 4.4 一つの意味しか理解していない単語については、比喩的な意味 (意味の発展) を考え、理解に役立てる。

4.5 Paragraph 中の語の言い換えに注意する。

5. 英語の文型に注意する。特に、名詞文、無生物主語、S+V+C、S+V+O、S+V+O+O、S+V+O+C。
6. 英語の文法を復習する。特に、phrase、clause 単位で読む。phrase や clause は意味のまとまり。
7. 動詞の pattern に注意する。自動詞・他動詞、目的語をとる動詞。
8. 接続詞に注目し、文と文との関係を知る。順接、説明、逆、原因・結果、例示。
9. Paragraph の構成を理解する。Topic sentence, Supporting sentences, Concluding sentence
10. Passage 全体の流れ、それぞれの Paragraph の役割を知る。
 - 10.1 Paragraph を簡潔な日本語にして、メモを残す。
11. 短時間で読んだ内容を頭の中で、整理し、メモを残す。
12. memo を取りながら読む。Paragraph ごとに keywords を選ぶだけでよい。
13. 速読に慣れる。Phrase/clause で意味を取る。

注

- 1 本論文は2022年3月 JACET 関西支部講演会で発表した一部をまとめたものである。
- 2 文部科学省では大学で学ぶ学生を学修者という言葉を使っているため本論では学修者とする。